

## 文学博士高瀬弘一郎君の『キリシタン時代の研究』に対する

## 授賞審査要旨

日本におけるイエズス会伝道の興廃については、早くから内外の研究者によって大小多くの業績が発表されている。戦前までは主として教会側の既刊の古典や書翰集によるものが多かったが、戦後文書撮影技術の飛躍的な発達と、教会側でそれまで殆ど公開されなかった根本史料が一般研究者にも公開されたこともあって、これ等の未刊文書による精緻な研究が、にわかに進んできた。しかし所謂キリシタン版の書誌学的、国語学的研究を除いては、教会関係者によるものが多く、当然のことながら、その研究の内容も、伝道の盛衰の総合的研究乃至後期の迫害や、伝道の発展を支える思想的方面や教会組織機構の変遷に中心が置かれているように見える。

本書はこれ等の諸研究に対して、教会活動の他の重要な経済的な側面に焦点をしばり、政治的な側面にも及んで、精力的に考究したもので、著者は多年ローマのイエズス会の文書館所蔵の文書をはじめ、主として南欧各地の文書館や図書館などについて、膨大な文書の中から多数の関係史料を搜索蒐集して、これ等を研究した成果を体系的にまとめて、以てキリシタンの布教活動の特質を解明せんと意図したものである。

本書は二部にわかれ、序論に当る第一部は三章から成り、大航海時代のカトリック布教の一環としてイベリヤ両国の世界二分割論と日本の関係、これに対する宣教師の祖国意識を中心として眺め、その軍事計画にも及び、これが本

質的にはローマ教皇によって正当化された靈的、世俗的事業に基づく植民政策をも包括した兩國の国家事業の一環であることを明らかにしている。本論に当る第二部は十章から成り、キリシタン教会の布教活動の基盤である経費や資産と負債など一一零細な数量的史料を集めて検討算定し、その増減と動向が日本におけるイエズス会布教団の人数と相關関係にあることを明らかにし、進んで資金の調達法やその方法に対する内部からの批判や是非の論議を詳述し、これと関連して当時貿易上にも行われていた『投銀』の性格について内外の史料によって吟味を加え、イエズス会が資金調達の一便法として、この投機的な手段を採用せねばならなくなった事情に及んでいる。ついで日本のイエズス会がインド各地に所有した土地とその所有過程、その収入額及び用途を究明しているが、さらに日本において教会の財務担当パードレであるプロクラドル七人が相ついで在任したことを各種史料に基づいて追究確認し、その地位の向上と職掌の推移を述べ、ことに教会の対日貿易事務の拡大につれて布教の変化と関連あることを認めて、宣教師の貿易仲介の実態を詳細に検討している。そして特にポルトガル商人の対日貿易において重要な比重を占めていた生糸貿易について果した宣教師の役割を随所において論述し、教会が年々ポルトガル商人の対日貿易に便乗して行った年間貿易額とその利益を一五七五年以来五十余年にわたって算定し、貿易船の欠航や海難事故がない場合には、教会の年間経費の凡そ三分の二、又はそれ以上をまかなうこともできる極めて重要な収入源であったことを詳細に論証している。尚、このようなイエズス会の公認の貿易活動のほか、イエズス会士個人が非公認の貿易斡旋や国内商業も行って、会の上長や巡察使から頻に禁止令が出されたが、これはその反面において、この非公認の経済行為が終始ひそかに続けられたことを語るもので、教会の不足がちな資金と物資を補い、教会活動を支持する点はあっても、会士た

ちの修道精神の墮落に繋るとして批判されたことを明らかにしている。最後に江戸幕府がキリシタン禁圧政策を断行するために、教会活動を支えてきたこのような収入源をも断たんとして、強硬なる貿易政策実施に踏み切った条件とその時期として、東亞におけるポルトガル商人の経済力減退の実情と、日本におけるシナとオランダ貿易の拡大を挙げて論述している。

即ち本書は、著者の多年にわたる弛まない努力精進の成果にして、日本におけるイエズス会の経済活動の諸問題を、多数の根本的未刊史料を駆使して、極めて精密丹念に考究したもので、従来ヨーロッパ人研究者の中に、その若干点に僅かに触れて論及するものがある位で、わが学界においては全く未開拓の分野を切り開いて、ここにキリシタン研究に新生面を拓いた実証的業績として、国際的にも高く評価すべき研究書と言うべきものである。